

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
授業づくり	(1)子どもが自ら調べたくなる、考えたくなる、話したくなる課題の設定や展開の工夫をする。 (2)誰もが安心して学ぶことのできるよう、ペアや小グループでの話し合いを大切に授業展開を行う。 (3)各教科・領域で、身につけさせたい資質・能力を意識した授業力の向上を目指す。 (4)魅力的な「ひとものこと」との出会いを目指して地域の材を発掘し、各教科・領域との関連付けを行う。	・日々の学習で、子ども達と教材との出会いを工夫したりペアや少人数でのグループ活動を設定したりした。友達と関わり合って学ぶことができる場面を設定して、子ども達が意欲をもって学習に取り組むことができた。 ・教職員が中沢のまちを探索し、地域にある材について深く知る機会を設けた。次年度以降に活かしていくため、今年度それぞれの学級で取り組んだ活動の記録を集約し、全職員で共有した。	B
豊かな心	(1)ペア活動・たてわり活動での異学年交流を通じて、相手を思いやる心を育成する。 (2)音楽活動や学校行事等を通じて、友達と同じ目標に向かう良さを実感できるようにする。 (3)子どもたちが個性を認め合いながら、居心地の良い学級・学校づくりを目指せるようにする。 (4)多様な価値感にふれられるように、地域とのつながりを感じられる活動を取り入れる。	・集会活動やたてわり活動では、高学年と低学年が関わる活動を通して相手意識を高められていた。 ・音楽集会や運動会、体験学習では、共に高め合う良さを子ども達が実感できていた。 ・生活科や総合的な学習では地域との交流を通して、関わり合うことの大切さに気付いていた。	A
健やかな体	(1)「食」の大切さや、食に関する興味・関心を高める食育の推進を行う。 (2)元氣アップタイムや学校保健委員会の取組を通して自己の健康に対する意識の向上を目指す。 (3)身につけさせたい資質・能力の向上を図るための体育科学習を充実させる。 (4)運動委員会や集会委員会による取組や集会活動による健康体力の向上を目指す。	・元氣アップタイムや給食週間等の委員会活動を通して、食に対する関心を高めることができた。また、年間を通して自己の振り返りを行うことで、健康を意識することができた。 ・体育科学習において、運動量を確保し、資質・能力の向上を図るために授業展開や場の設定を充実させることができた。また、集会活動の中で体を動かす活動を取り入れることで健康体力の向上を目指すことができた。	B
地域とともに歩む	(1)地域・防災科や、地域・防災科に向けた1～5年生の学習活動を充実させる。 (2)日々の学習活動で、子ども達が地域とのかかわりを意識化できるようにする。 (3)地域や社会の多様な人々との出会いを通して、自らにできることを考えられるようにする。	・生活科・総合的な学習の時間を中心に、地域とのかかわりを広げることができ、人材活用、関係機関とのつながりが増えた。 ・連合町内会、福祉関連の方々などとの交流を通して、行事の企画への参加や、盲聾の方との関わりを進んで考えることができた。	B
いじめへの対応	(1)居心地の良い認め合う学級、学校生活により、いじめの未然防止に努める。 (2)教科担任制など複数の教職員の児童理解に根差した支援体制により、早期発見、早期対応につなげる。 (3)いじめにあった児童の心のケア、意向に寄り添った対応をする。状況に応じ関係機関と連携し、適切な指導、支援を構築する。	・日常の授業で友達と対話を重ねる活動に取り組んできたことで、安心して学校生活を過ごすことにつながった。 ・いじめの校内の状況については、全教職員で共通理解を図った。児童理解が深まる研修を設定し、子ども達とのかかわりについて見つめ直すようにした。 ・不安を抱えた子どもや保護者の意向に寄り添えるように、児童支援専任を中心として、組織的に対応してきた。	A
人材育成・組織運営(働き方)	(1)メンター研、中堅教員研修等の校内研修時間を確保する。 (2)校務分掌を少人数化し、責任の明確化と意思決定のスピード化を図る。 (3)学年支援、学年担当教員を割り当て、チーム学年経営を推進する。 (4)キャリアステージに応じた先輩教員による、ミドルリーダーや主幹教諭候補の育成を行う。	・メンター研は、意図的計画的に学級経営や授業づくり等について研修をしてきた。中堅教員研修では、研究や実践内容について全職員が理解し、学校として取り組むことができるようにした。 ・校務分掌は、役割分担を明確にするとともに、時間を有効につかって会議を進めてきた。また、働き方改革推進チームを立ち上げ、意識改革が進んだ。 ・学年主任や指導部主任等が、学校運営に積極的に関わることによってリーダー育成を進めてきた。級外の職員も学年経営に責任をもって携わっていた。	A
小中一貫	(1)9年間で育てる子ども像を中学校と共有し、小中の職員が合同で授業研究や研修会を行う。 (2)小中合同の児童生徒交流会を行う。 (3)中学との円滑な接続に向け、中学校教諭によるリード授業(6年図・理・音)や英語科教諭による外国語科授業(5・6年通年)、数学科の先取り授業(6年)を行う。	・小中合同の研修会で、子ども達の良さや課題について共有し、育てたい子ども像について見直しを行ったり、授業の在り方を学び合ったりした。 ・中学校教諭によるリード授業や外国語科授業を通して、子ども達は中学校の生活について関心や意欲をもつことができた。 ・年間を見通した活動になるよう、小中連携担当で連絡を密に取り合い、話し合いの場を設けた。	B
地域学校協働活動	(1)地域学校協働本部を立ち上げ、地域と学校の連携を強化する。 (2)地域の方々による登校の見守り(学援隊)について協議し、安全対策の充実を図る。	・今年度は地域学校協働活動事業の母体として「旭中・中沢小-CSC本部」を立ち上げた。今後の小中連携しての地域学校協働活動事業を更に推進していく。 ・学援隊の皆様のご献身的なご努力のおかげで、安全な登校を継続することができた。	A
児童指導	(1)スタートプログラムを取り入れ進学、進級時の人とのつながりを丁寧に確保する。 (2)YPアセスメントなどで学級の実態に応じた社会スキルを設定し、認め合う学級集団づくりにつなげる。 (3)人権週間など、子どもの日常に即した学びを随時取り入れ、様々な人の思いにふれ、人権感覚を高める。 (4)年2回のアンケートで子どもと個別の教育相談を実施し、子どもが安心して学校生活を送れるようにする。	・環境の変化が著しい4月を、ゆとりある学級開きを校内で共有しながら進められた。また、子ども同士や教師とのつながりをもてるようにした。 ・子ども達に身に付けてほしい社会スキルを年間で見通して設定した。学級内における自己効力感や自尊感情などを確かめながら、必要に応じた指導を取り入れた。 ・子ども達のアンケートを年間2回設定したことで、話を聞いてもらえたと感じている児童が多かった。	A
ブロック内評価後の気付き	小中一貫の取組に関して、今後もっと打ち出しているのも良いのではないかとのご意見が出た。児童生徒が全校で交流したり、授業参観で中沢小の保護者が旭中を見に行ったり等、コロナ禍のためできなかった活動を再開していくだけではなく、新たな取組を考えていくことも大切だと考える。		
学校関係者評価	6年生が総合的な学習の時間で取り組んだ「中沢フェスティバル」を始め、地域と関わり、地域に目を向けた活動はどれも良かったので、今後も継続してほしい。 ICTの整備が進んでいるが、それを扱う情報モラルについては年齢を問わず教えていく必要がある。子どもだけでなく、保護者にも理解と協力をしてもらう必要があるため、学校から発信していくことが大切だと考える。		
中期取組目標振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 〇たてわり活動や全校行事など、他者と関わり合う活動を再開できるようになってきたことが、子ども達の満足感や学校が楽しいと感じる気持ちに繋がった。 〇授業づくり分野の取組として地域の材を見直したことは、子ども達の興味・関心に基づいた学習の展開に繋がっていくと感じた。今後更に深い学びにしていきたいために、各学級の取組の記録・共有が大切になっていく。 〇小中一貫の取組について、コロナ禍で数年間でできなかった活動を取り戻していく程度ではあったが、今後3年間を見通して、活動の拡大や、もっと情報を保護者や地域に発信していく必要性を感じた。 		